

第七十回〇先生賞

敦盛

右の通り贈ることを決定した。

令和六年一月



作者略歴

一九六一年 神戸市生まれ

二〇一八年 コスモス短歌会入会

住所 神奈川県川崎市

神奈川
印^{いん}出^で美由紀^{みゆき}

コスモス短歌会

作者感想

キツチンのテーブルで赤ペン先生の内職をして二十年、このまま歳をとるだけかと思っていました、そのテーブルで今は短歌を作っています。朝日カルチャーセンターの高野先生、影山先生の講座、コスモス神奈川支部歌会に参加するうち、自分の歌は独りよがりになりがちなこと気がきました。

また、コロナ自粛の期間中、大きな声を出し身体を動かすことに挑戦したくなって、能の稽古に通い始めました。

〇先生賞は私にとっての大きな賜物です。先生方の直接・間接のご指導、神奈川歌会の方々をはじめ出会った全ての皆様との関わりのお陰です。心から感謝申し上げます。

敦盛

第七十回 O 先生賞受賞作品 神奈川 印出美由紀

この夕べ風ざわたりあむ須磨の浦寿永二年の嵐にとほく

われひとり月の入り江にゐるごとし春あらし吹く初舞台前夜

憂ひごとロザリオ数珠玉入れに蔵ひおき能の舞台に立つ日を迎ふ

令和五年四月三十日ひと日腕時計せぬ時間を生きる

師に借りて着くる袴の朱の色は「サレクンペン軽業師」のタイトの朱色

何度見ても困つた顔のをばさんの瘦軀がうつる楽屋の鏡

同門の見知らぬ人のむれに入り割り箸で冷えたおにぎりくづす

腕時計持たぬ時間のただなかで二時からですと声を掛けらる

たましひのひとつを乗せてゐたやうな舟置かれあり舞台の裏に

本番のまぎは切り戸で渡されし修羅の扇の日輪と波

修羅扇見つつ憶へり須磨浦にこんな大波滅多に立たぬ

津の国と播磨を分かつ一の谷にあまた赤旗倒れたりけむ

切り戸より出づればまぶし幽玄なはずの能楽堂の照明

全身に力をこめて立ちあがる十七歳の武者にならむと

足拍子踏めば床ゆかからからだぢゆう伝はりのぼる波のごときが

張り詰めた舞台の上の空気圧を馬手の扇でゆつくりひらく

よろめいた利那左の足裏でぐつと踏みたり檜ひのきの床を

大き弧をゑがき舞台をめぐり来て仕手柱見ポラリスゆ北極星として

先生が最後の稽古でただ一度教へてくれた力抜く箇所

修羅扇を開きて上ぐる曲なかば浪はたしかにわが背を越えつ

ひろびろと舞台をあゆみわたくしでなきわたくしが時間を統ぶる

けふわれに降くだりまさざる敦盛をひとしほ恋ひて扇を閉ぢぬ

切り戸とふ境界くぐり出でくればもはや戻れぬ聖正方形

正座して師のねぎらひを聞くここは大き球弧の突端である

舞まいひ終へしのちのいく日かは鉄線花てつせんかこころに抱じやくじやうき寂静じやくじやうとをり

悔恨や謝罪は言はず直実はただ敦盛を弔なぐさひにけり

敦盛は「終つひには共に」と謡ひけりおのが敵かたきの念仏を聞き

かつてわが通学路なりきそのかみの直実征きし塩屋の道は

坂東の武者が聞ききたる笛の音の沁みいるやうな塩屋の入り日

ふさばなの令法りやうぽうの揺るる道みちを来てロザリオ一環いっくわん唱へむとする